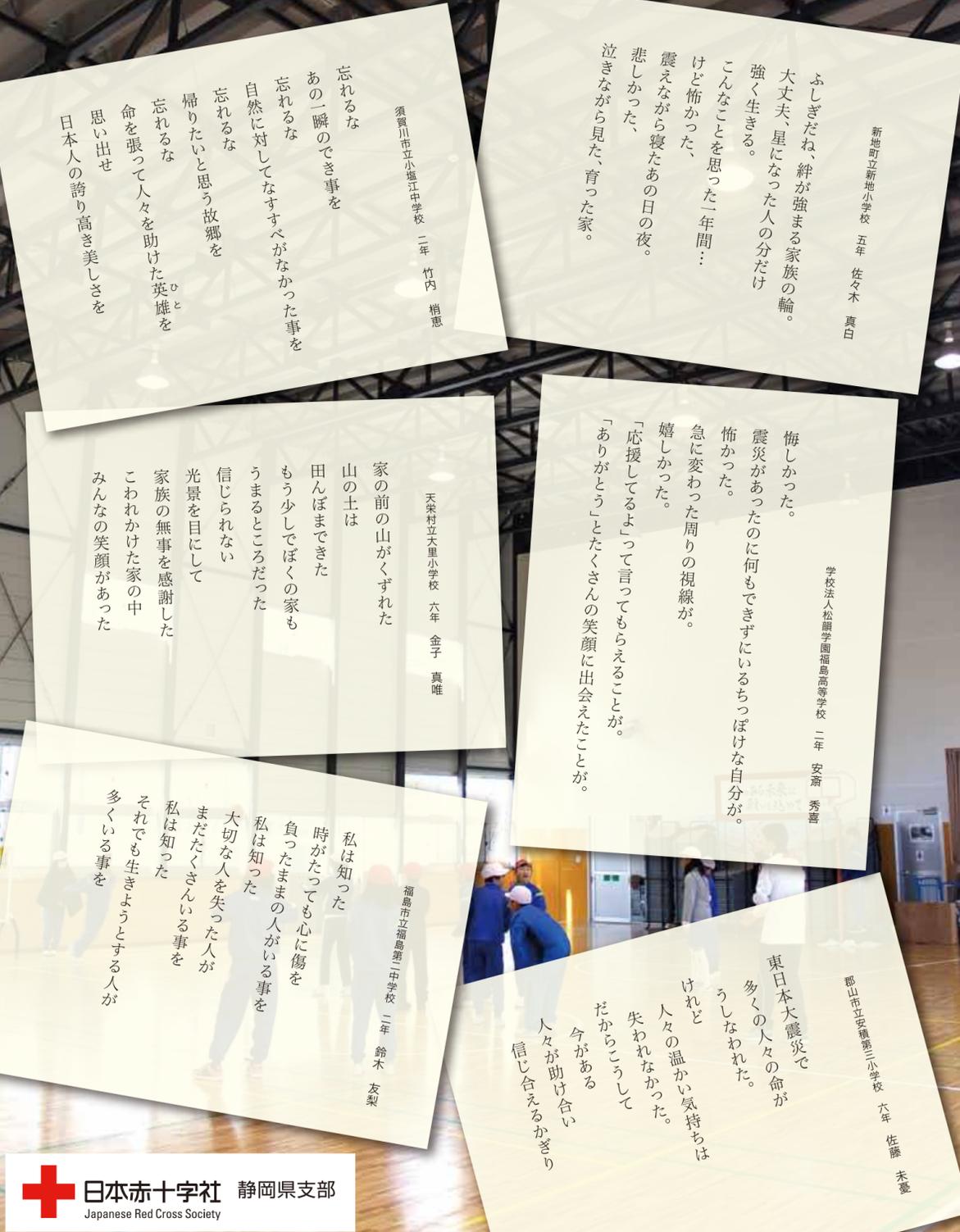


記憶をのこす記録 Vol.2

東日本大震災における赤十字活動を、
現地の声から。

2012 日本赤十字社福島県支部
(詩・100文字提案 作品集「東日本大震災」子どもたちからの声)より



つなぐ ささえ つづく

本紙「記憶をのこす記録 vol.2」は、東日本大震災において日本赤十字社静岡県支部がどのような活動をしたかのレポートです。日本赤十字社の使命である「苦しんでいる人を救いたい」という思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守る」を、災害の現場でも実行してきました。みなさまからお寄せいただいた活動資金が、東日本大震災においてどのような活動に使われていたか、その事実を被災地で自らの復興に汗を流す方々の声でお伝えします。私たちがとった行動は、支援をいただいたみなさまの行動でもあります。今後とも変わらぬご支援、ご協力を、よろしく願いたします。



活動資金へのご協力のお願い

東日本大震災における救護活動(救護班の派遣や救護物資の配付等)をはじめ、救急法の講習など「命と健康を守る」赤十字活動を支えているのは、皆さまからお寄せいただく社資(赤十字活動資金)です。引き続き、ご協力をお願いします。

日本赤十字社静岡県支部にご寄付をいただいた場合、税制上の優遇措置が受けられます。

- 郵便局・ゆうちょ銀行からのお振込によるご協力
口座番号:00820-3-111391
加入者名:日本赤十字社静岡県支部
*窓口からの振込は手数料が免除されます。
- 銀行からのお振込によるご協力
専用の振込用紙がございますので、お問い合わせください。
- 口座引落によるご協力
指定の預金口座から自動引落で寄付することができます。
*専用の申込用紙に必要事項を記載していただく必要があります。
- 遺贈や相続財産によるご協力
遺贈による寄付や相続財産の寄付も承っております。
- ご持参によるご協力
日本赤十字社静岡県支部や各市区町の赤十字担当窓口へ直接ご持参ください。



静岡県支部では、発災から地域医療が立ち直るまでの間、継続的に救護班を派遣

【医療救護】		【療養施設】			
日付	救護班(班長)	活動場所	日付	救護班(班長)	活動場所
3月11日	静岡	静岡	3月11日	静岡	静岡
3月14日	静岡	静岡	3月14日	静岡	静岡
3月16日	静岡	静岡	3月16日	静岡	静岡
3月18日	静岡	静岡	3月18日	静岡	静岡
3月20日	静岡	静岡	3月20日	静岡	静岡
3月23日	静岡	静岡	3月23日	静岡	静岡
3月26日	静岡	静岡	3月26日	静岡	静岡
4月3日	静岡	静岡	4月3日	静岡	静岡
4月6日	静岡	静岡	4月6日	静岡	静岡
4月15日	静岡	静岡	4月15日	静岡	静岡
4月17日	静岡	静岡	4月17日	静岡	静岡
4月22日	静岡	静岡	4月22日	静岡	静岡
4月25日	静岡	静岡	4月25日	静岡	静岡
5月12日	静岡	静岡	5月12日	静岡	静岡
5月15日	静岡	静岡	5月15日	静岡	静岡
6月19日	静岡	静岡	6月19日	静岡	静岡
6月23日	静岡	静岡	6月23日	静岡	静岡

【病院支援】		【こころのケア】			
日付	救護班(班長)	活動場所	日付	救護班(班長)	活動場所
3月19日	静岡	静岡	6月2日	静岡	静岡
3月28日	静岡	静岡	7月4日	静岡	静岡
3月30日	静岡	静岡	8月7日	静岡	静岡
4月4日	静岡	静岡	5月2日	静岡	静岡
4月9日	静岡	静岡	5月9日	静岡	静岡
4月13日	静岡	静岡	5月12日	静岡	静岡
4月19日	静岡	静岡	5月15日	静岡	静岡
4月24日	静岡	静岡	5月19日	静岡	静岡
4月29日	静岡	静岡	5月22日	静岡	静岡
4月30日	静岡	静岡	5月25日	静岡	静岡
5月4日	静岡	静岡	5月28日	静岡	静岡
5月9日	静岡	静岡	5月31日	静岡	静岡
5月12日	静岡	静岡	6月5日	静岡	静岡
5月15日	静岡	静岡	6月8日	静岡	静岡
5月19日	静岡	静岡	6月11日	静岡	静岡
5月22日	静岡	静岡	6月14日	静岡	静岡
5月25日	静岡	静岡	6月17日	静岡	静岡
5月28日	静岡	静岡	6月20日	静岡	静岡
5月31日	静岡	静岡	6月23日	静岡	静岡



後手に回った岩手に 静岡県支部の動きは素早く、心強かった。

東日本大震災の被害の大きさ、悲惨さというのは、本当に心が痛みます。静岡でも、3月15日には震度6強の地震があったにもかかわらず、東北に支援の目を向けてくださり、頭の下がる思いです。

静岡県支部の救護班は、発災翌日の12日に岩手に到着。そして、釜石に救護拠点を築き上げていただきました。救護物資、ボランティア活動、義援金等、さまざまなお支援をいただいたことに厚く御礼申し上げます。

情報がない中での自主的な活動

発災当時はとても混乱していました。正しい情報が入ってこないのです。静岡県を含め、各地から救護班が続々と盛岡赤十字病院に集結したものの、内陸部で被災した患者さんは少なかつたでも沿岸部の状況がわからない。救護班からは現場に行かせてくれと声上がるも、二

釜石、大槌に足跡を残した
静岡県支部

次災害の可能性のあるところに行けとは言えません。情報がないというのは、とても苦しく、つらかったです。

確かな情報が入ったのは、救護班が現地に入ったとき。12日に静岡と兵庫の救護班が住田に入ったものの被害が少なく、釜石が大変なことになっているという情報を得て自衛隊とともに釜石へ。そこで、瓦礫の山を目の当たりにして愕然としたと聞きました。釜石の鈴子広場を救護拠点としましたが、実は確かな安全が確保されているわけではないと聞きました。

何もなしどころからの立ち上げですから大変な活動だったはず。遠野に救護対策本部を設置し、毎日釜石と往復しながら多くの時間を費やして鈴子広場にプレハブの救護所が完成。救護拠点の基礎ができたのは、静岡県支部の活躍のおかげです。本当に助かりました。

岩手県支部では、今年、来年だけではなく、仮設住宅がなくなるまで息の長い復興支援をしていきたいと考えています。そして、静岡県で災害が起きないことを祈りながら、もし何かがあったら、今度は我々が守るといふ気持ちでいきたいと思います。

日本赤十字社 岩手県支部
事業推進課課長 長谷川信之氏



明日へつなぐ支援を、今日も。

「ありがとうございました」
東日本大震災の被災地を訪ねると
多くの被災者や救援活動をされている方々から
声をかけられます。
まだまだ復興には遠い状態にありながらも
相手を思いやれる被災者のみなさんのところは
とても強く、そして、やさしい。

発災から二度目の冬を迎えようとする被災地では
クリニックにインフルエンザの予防注射を待つ人があふれ
仮設の校舎で学び、仮設の体育館で動き回る子どもたちがいました。
みんなが、必死になって日常を取り戻そうとしているかのよう。
医療も、教育も、赤十字が核となって支援した活動です。
医療においてはあくまで地域医療の自主性を優先し
サポートするのが赤十字のスタンス。
地域の医療が立ち直ることが、復興への第一歩であると考えます。
生活優先の陰に隠れがちですが、じつは教育はとても重要。
子どもたちの元気こそが地域の勇気の源になります。

静岡県支部の救護班が活動した岩手県釜石市、大槌町からは
いまでも変わらず感謝のこぼれが。
その声を支援していただいたみなさまに、そのままお届けします。
そして、本当の日常が訪れるまで
私たちはみなさまと継続的に支援をつづけていきます。



迷っているとき、赤十字の救護班に言われた
「決めるのは地元、そのとおりに我々は動く」と。
目が覚めました。



1週間、24時間体制で診療にあたる

私のクリニックが入っている建物は、6年前まで市立病院だったこともあり、指定避難所になっていました。発災当時、頼りになる人はたくさん来ましたが、ライフラインはすべてつながらない状態。水没したクスリをかるうじて引き上げ、何とか対応していました。外来患者の受け入れは、その後1週間、24時間体制がつづきま

した。
みんなが避難民化し、水没しなかった家が避難所化していて、その規模の把握ができない。人づての情報は曖昧で、自分で見たものを自分で判断するしかありませんでした。

赤十字の支援もあり
災害対策本部が発足

それが、赤十字が来たことで、ようやく秩序だつて行動ができるようになりました。発災直後の3月13日、釜石に一番早く来ていただいたのが日本赤十字社静岡県支部。鈴子広場に救護所ができ、16日の町議に私と医師会長が出席して災害対策本部が発足し、赤十字にも入ってもらい協力しながらすすめることになりました。
さまざまな面で赤十字は、災害のプロだということを実感しました。災害支援で重要なのは長期戦に備えた人員の配置とコーディネートする力です。いわゆる組織力が求められます。多くの団体から医療支援をいただきましたが、組織力では赤十字と自衛隊が群を抜いていました。人の入れ替えがあつても引き継ぎがきつちりなされ、それが長期に組めることが、被災地の災害対策本部に大きな安心感を与えてくれました。

はじめから最後まで
見すえた長期支援

実は、医療のまわりにはいろいろ複雑な業務があり、単純に医療チームが来ましたが、帰りまです」というわけにはいきません。ある医療班が撤収するといいたときには、避難所の人たちに告知し、責任者の了解を得なければなりません。常駐が山を越えて情報を持ってきてくれました。何とか子どもたちの安否確認ができたのが発災5日後の3月16日。残念ながら、小学生3名、中学生2名の確認ができませんでした。

卒業式、始業式、入学式を至急に

20日には、震災後初めての校長会議（小学校5校、中学校2校）を支援物資の横で実施。「卒業式は」勉強は」という声が聞こえる中で、少しづつ動き出しました。流されてしまった一部の卒業証書を刷り直し、29日までに卒業式を行うことに。式といつても、中には校長先生たちが避難所を回って二人ひとりに手渡すだけの簡素なものもありました。
つぎに始業式と入学式。新しい教科書も流されてしまったので新たに手配し、なんとか4月20日をめどに始業式を、25日には入学式を行うことを決め、教育の空白期間を少なくしようと努力しました。

実は学校も避難所になっていましたので、被災者の方々にお願ひして、場所をゆずってもらわなければなりません。その時は、お叱りもいただきました。「生きるか死ぬかの時に、子どもたちの教育を優先するのはおかしい」と。それでも、教育の空白により子どもたちが大人にならなるとき不利にならないように、今学ばなければならぬと、生懸命に説いて回り、何とか場所を確保しました。

教育は生活の一部を実感

つづいては児童生徒の移動手段。当然、公共

する保健師さんたちにも案内が必要だし、後任の部隊をさがす必要もあります。カルテを含めた患者さん情報の引き継ぎも大切です。やることがいっぱいあります。机の上だけで済む問題ではありません。その辺りの段取り、こちらの思いも赤十字はよく理解し実施してくれました。
地元が尊重されたこともありがたか。いくつものフェーズ（段階に応じた過程）があり、慢性的な巡回診療の対応からはじまり、地元の医療機関が立ち直ってきたら徐々に活動を縮小していき、最終的に地元医療機関への誘導、撤収がスムーズに展開される。その中で、トラブルはひとつもありませんでした。地元の自立を含めることも、重要な災害支援なんだと学びました。

災害のプロから多くのことを学んだ

災害対策本部を立ち上げる際の指導の仕方にして的を得ました。赤十字のある先生に「決めるのは地元、あなたたちの指示どおりに我々は動く」といつてもらえたのが、本当に心強かった。コーディネートの仕方、ロジック（正当な判断）、統括の仕方など、いただいたアドバイスは数え切れないほどです。日を追うごとに、各地からの医療ボランティアは撤退していき、そのたびに赤十字に引き継いでいきました。6月には赤十字に体化、やはり最後まで残ったのは赤十字でした。
私たちは、多くの人々に支えられてきました。とくに赤十字のみなさん。そして、静岡県のみなさんのご厚意には感謝しております。今後は地域医療をさらにすすめる、新しいコミュニティをつくり、地元の連携を強め、医療介護のまちづくりをすすめていきたいと考えています。

交通機関は全滅です。50か所近くある避難所から登校するにはスクールバスが必要、そこでバスを県内のバス会社から21台チャーターしましたが、1日約130万円の出費に。とにかく、分散授業はしたくないし、規則正しい生活を子どもたちに求めました。決まった時間に登校して、チャイムに合わせて授業、休み時間を友だちと過ごすことをこの時期だからこそ守りたかったのです。

活躍する赤十字の支援
仮設体育館とスクールバス

赤十字の支援には、本当に助けられました。9月には仮設の学校ができ、子どもたちは広いスペースでみんなと仲良く学んでいます。この仮設体育館は赤十字に建てていただきました。子どもたちは、本当に喜んで、元気に動き回っています。うれしいことに、ここで練習をした中学のバドミントン部が十数年ぶりに県大会に出場することができました。同じく赤十字に提供いただいたスクールバス5台も、現在フル稼働しています。

被災したとき、生きる支援が優先されるのは当然です。と同時に教育へ目を向けていただきたい。教育も生きるために重要なことだから。

スクールバスと仮設体育館は、
子どもたちの元気を取りもどしてくれた。
教育は、大切な生活の一部なんです。

Japanese
RedCross
Society
SHIZUOKA

あの日、教育も被災した



私は役場で津波をかぶり、一夜を屋上で過ごしました。職員は、40名が亡くなりました。翌日、高台にある教育委員会の施設にもどり、学校、児童生徒の状況を確認しようにも、把握が全くできません。自分の足で確認するしかないのです。すると、各避難所から校長、教師